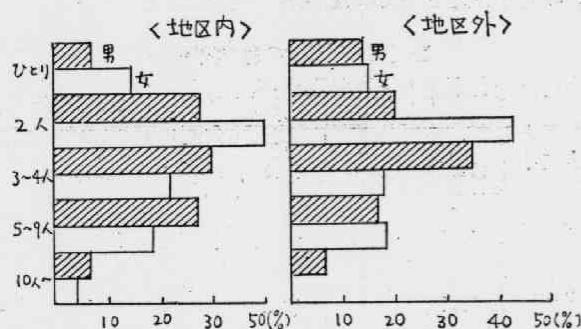


第5節 小さくなった遊び集団

—屋外で何人と遊んだか—

現代、子どもの遊び集団の縮小化がさかんにいわれているが、調査結果は表15のようである。

表(15) 遊び集団の大きさ



地区別に見るとそれほど変化はないが、地区内外を問わず、男子は3~4人のグループが最も多く(地区内29.3%, 地区外35.4%), 女子は2人のグループが最も多い(地区内39.8%, 地区外42.5%)。

また、放課後家に帰って、屋外でずっとひとりで遊んでいる子どもも意外と多い(地区内男子6.9%, 女子14.2%)(地区外男子12.5%, 女子15.0%)。

このような傾向は、あいりん地区(近隣)において、たくさん子どもたちと遊びのできる場所や、遊びの機会のないことを裏づけるものであろう。このことは、子どもの遊びの中でいったいどんな意味を持つのだろうか。

そこで今一步進めて、屋外での遊びの相手は誰なのだろうか…。表16を見よう。学校別にはほとんど同じ傾向であり、やはり「友だち」がトップを占めている。しかし、屋外で「きょうだい」のみと遊ぶと答えた子どもが、萩之茶屋小学校13.6%、今宮小学校13.7%とかなりいることは注目されよう。やはり、屋外で「きょうだい」だけで遊ぶ割合が、相対的に高いといえる。また、それが地区内の特徴であるともいえるのではないか。

表(16) 屋外での遊び相手

	ひとり	きょうだい	友だちと兄弟	友だち	保護者	不明
萩之茶屋小	21 (12.0)	24 (13.6)	12 (6.8)	117 (66.5)	2 (1.1)	0
今宮小	12 (5.7)	29 (13.7)	20 (9.4)	136 (64.1)	4 (1.9)	11 (5.2)
あいりん小	4 (12.1)	0	1 (3.0)	13 (39.4)	3 (9.1)	12 (36.4)

このような遊び集団の縮小などが、結果的には遊びの内容を質的に貧弱にさせる要因となるとともに、そのような状況に落とし入れたさまざまな条件(たとえば児童公園の欠如等)について、われわれは考えねばならない。

そして、今一ついえることは、遊び仲間の関係がヨコ(同じ年ごろ)の結びつきであることがほとんどである。従来のようなタテの結びつきの遊び仲間集団は皆無である。この遊び集団のタテからヨコへの変化は、いかなる意味を持っているのであろうか。ある学者の説明によれば、それは……

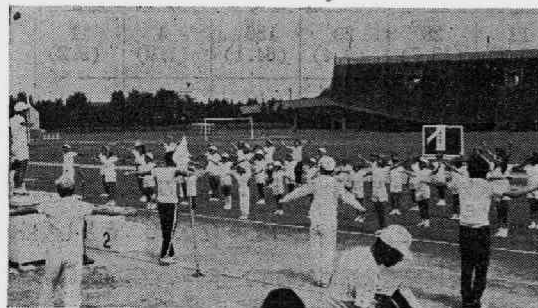
- (1) 子どもの世界に伝承されてきた遊びの文化の衰退、あるいは

喪失。

(2) 子どもたちの安全を守る自衛組織の消滅が欠点であり、長所としては、より民主的人間関係が生まれてくる。

としている。ただ地区の現状は、このような問題を考える前に、あまりにも遊び集団が小さすぎる。したがって、われわれは、子どもの「遊び場」を保障したのち、グループワークの連用によって、子どもの遊び方をより有意義なものにしていく努力をしなければならない。

第6節 屋外遊びベスト5



いろいろ限られた条件の中で、子どもたちはどんな遊びをしているのだろうか。学校別、男女別に分けてみて、子どもたちの遊びはそれぞれ40種ぐらいで、内容的に変化に富んでいるとはいいたい。その中のベスト5をひろってみよう(表17参照)。

今宮小学校の地区内の子どもたちの遊びが、きわだって野球に集中しているのは、野球クラブの対抗試合の練習のためである。場所は天下茶屋の児童公園である。これはむしろ例外といえよう。それを除くと、自転車に乗る子どもたちが多い。子どもたちは自転車遊

びのために地区外へ乗りだす。交通事情を考え合わせると、まことに危険である。しかも自転車に乗る子どもたちは、低学年に多い(自転車、3校合計31名中1、2年生16名、52%)。

ボール遊びがキャッチボールに限られているのも特色といえる。全体で20名、中学年(3、4年生)に多い。

その他のボール遊び、すなわちソフトボール、サッカー、バドミントン、テニスは全体で1~2名であり、遊び場との関連が想像できる。ソフトボールやサッカーは、したくてもする場所が子どもたちには保障されていない。

男子に比較すると、女子には特色が見られる。と同時に、校区の特色が現われている。(表18参照)

表(17) 遊びのベスト5

地区男子 人

	萩之茶屋小	今 宮 小	あいりん小
1	自 転 車 12	野 球 27	おにごっこ 1
2	ブ ラ ン コ 10	自 転 車 8	砂あそび 1
3	キャッチボール 9	花 火 5	自 転 車 1
4	ベ ッ タ ン 8	キャッチボール 4	鉄 棒 1
5	野 球 7	ブ ラ ン コ 4	ベ ッ タ ン 1

表(18) 遊びのベスト5

地区内女子

	萩之茶屋小	今 宮 小	あいりん小
1	自 転 車 6	なわとび 5	おにごっこ 3
2	ブ ラ ン コ 5	おにごっこ 5	ブ ラ ン コ 2
3	なわとび 5	ボール遊び 5	—
4	は し り 5	ま ま ご と 4	—
5	おにごっこ 5	自 転 車 2	—

今宮小学校の子どもたちは、ブランコや鉄棒でほとんど遊んでいない。原因は何か。萩之茶屋小学校の子どもたちは、四条ヶ辻公園や甲岸公園を利用してブランコなどで遊んでいるのに対し、今宮小学校の子どもたちは、その場がない。つまり、三角公園はそのような場所でないことの証拠である。

全体的に見て、子どもたちの遊びの傾向はどうだろうか。たとえば表19の府教委の調査と比較してみよう。あまりめだつた違いはない。ただ府教委ではベスト5中に球技が3種目入っているのに対し、1種目にすぎない。6年生でキャッチボールをしたのはたった1名という現状にある。前述のとおり、サッカーやドッジボールなどはする場所がない。子どもたちの遊びは、地域の環境の反映といえよう。

女子の場合はどうだろうか。府教委と3校全体との比較では、表20のように著しい違いが見られる。

府教委のベスト5のうち、ベスト3までが球技であることも、子どもたちの発達と遊びとが対応している。

表(19) 府教委調査との対比ベスト5 男子の部

	府教委調査	3 校 調 査	
		全 体	6 年 生
1	野 球	野 球	自 転 車
2	自 転 車	自 転 車	野 球
3	ドッジボール	キャッチボール	ブ ラ ン コ
4	キャッチボール	ブ ラ ン コ	キャッチボール
5	サ ッ カ ー	花 火	か くれ ん ぼ

表(20) 府教委調査との対比ベスト5 女子の部

	府教委調査	3 校 調 査	
		全 体	6 年 生
1	バレーボール	自 転 車	バレーボール
2	バドミントン	な わ と び	ブ ラ ン コ
3	ドッジボール	鬼 ご っ こ	ボ ー ル な げ
4	自 転 車	ブ ラ ン コ	自 転 車
5	キャッチボール	ボ ー ル な げ	花 火

しかし、3校の場合、球技はただ一つバレーボールだけで、ベスト2のブランコなど一つの特色である。女の子の場合も遊び場からくる制限のほうが強いといえる。

第7節 遊ぶとき、どんなことがいやですか

子どもたちに、「遊ぶとき、どんな点が障害ですか」と聞くと、表21のような結果になった。この結果はそのまま、この地区が子どもたちにとってどんな地区であるかを雄弁に物語っている。それは、地区と地区外の子どもたちの意見を対比するとき、さらに明らかになる。

地区外の子どものみならず、障害の第2番目が子ども同士の仲間はずれ（上級生、仲間はずれ）であるのに対して、地区内の子どものみならずおとなたちにじゃまされることを強調している。

たしかに、おとなが子どもの遊びをじゃますることはある。たとえば、公園で遊んでいたらおとなたちが来て野球を始め、子どもたちを公園から追いだす、といったことはどこでも見られる光景である。しかし、ここでの事情はいささか違う。仕事にアブレた労働者

表(21-1) いやなことベスト5

()人

	地 区 内	地 区 外
1	酔 っ ば ら い (66)	自 動 車 が 多 い (19)
2	おとながじゃます (64)	上級生がじゃます (10)
3	自 動 車 が 多 い (40)	おとながじゃます (9)
4	とばく、ノミ行為 (17)	仲 間 は ず れ (8)
5	公 園 が 狭 い (17)	公 園 が 狭 い (7)

表(21-2) 学校別 いやなことベスト5

	萩之茶屋小	今 宮 小	あいりん小
1	おとながじゃます (35)	おとながじゃます (26)	酔っばらい (7)
2	酔っばらい (33)	酔っばらい (26)	おとながじゃます (3)
3	自動車が多い (24)	自動車が多い (16)	とばく、ノミ行為 (3)
4	上級生がじゃます (12)	とばく、ノミ行為 (12)	—
5	公園がきたない (7)	公園がきたない (11)	—

のある者は、酒を飲み、道路で、公園で1日を過ごすことになる。当然、子どもたちの遊びの中に介入してくる。それは必ずしも悪意からではない。しかし、子どもにとって不愉快であることには変わりはない。

3時から4時ごろの三角公園には200名、多いときには300名にもおよぶおとなの中で遊んでいるのが現状である。その結果、地区内の子どもの「イヤなことベスト5」のうち、じつに64% (総数225名中145名) まだがおとなによるもの、とは考えさせられる。しかもおとなのじゃまは酔っばらいのみならず、あいりん小学校、今

宮小学校の子どもたちがくるとばく、ノミ行為一路上をあげていることは、おとなたちに対する痛烈な批判ではないか。

しかもこの現実、子どもたちにとって性別に関係ないことは表22でも明らかである。子どもにとってやはり「いやなことは、男女におとながじゃますることや、酔っばらいの存在である。



子どもたちにとって今問題なのは、遊びの内容よりも遊びの場であり、遊びを妨げるのは受験勉強や親たちの干渉ではなく、おとなたち

の存在なのである。

表(22) 男女別 いやなことベスト5

性別	地 区 内		地 区 外	
	男	女	男	女
1	おとながじゃます	酔っばらい	自動車が多い	自動車が多い
2	酔っばらい	おとながじゃます	上級生がじゃます	おとながじゃます
3	自動車が多い	自動車が多い	公園がせまい	公園がきたない
4	公園が狭い	とばく、ノミ行為	—	—
5	とばく、ノミ行為	上級生がじゃます る、公園がせまい	—	—

地区外の子どもたちの状態を、名古屋と比較してみよう。困ることの第1位は「交通が危険」、第2位「遊ぶ時間がない」、第3位「公園や広場がない」、第4位「家の人が勉強するようにやかましく言う」、第5位「遊び道具が少ない」などで、地区外の子どもたちとの間にはいくぶん共通点を見出すことができる。

以上のような遊びをめぐる子どもとおとなの関係を見るとき、おとなを排除するだけでは問題の解決にならない。なぜ酔っぱらいが多いのか、なぜおとなたちが子どもの遊びに介入してきてじゃまするのか、ということをも考え合わせる必要がある。

子どもたちの遊び場が保障されること、すなわち、おとなたちの「遊び場」「いこいの場」が保障されること以外にはありえないとさえいえないだろうか。

労働者の街での子どもたちの遊び場の条件づくりは、共存ということが絶対条件である。

第8節 どんな遊び場がほしいか

問い「どんな遊び場がほしいの」。

答え「聞いてどうするの、ほんとうにつくってくれるの、つくってくれるなら言うけど」。

5年生の子どもの反応である。このような子どもたちの反論の前で、われわれは非常に肩身の狭い思いをする。子どもたちの声を聞いても、さてどうしたものか、と考える。今まで、聞きっぱなしではなかっただろうか。

子どもたちは「広い遊び場」を求めている。これが子どもたちの

結論である(表23—1参照)。全体で435件(ひとりで一つ以上の希望を述べた子がいる)の希望のうち、じつに50%以上(地区内174件、地区外56件)が広い遊び場を求めている。「広いきれいな遊び場」を地区内外の子どもたちは、共通に求めている。しかし、問題はその内容である。

表(23—1) 子どもたちの求めている遊び場ベスト5 ()%

	地 区 内	地 区 外
1	広 い 遊 び 場 (53.2)	広 い 遊 び 場 (51.9)
2	のりもの 遊 具のある公園 (9.8)	のりもの 遊 具のある公園 (19.4)
3	おとなのいない所 (8.0)	きれいな公園 (6.5)
4	きれいな公園 (6.7)	広くて遊具のある公園 (5.6)
5	広くて遊具のある公園 (5.5)	広くて緑のある所 (4.6)

子どもたちの求めている広い場所とは、野球のできるところであると同時に、野球をやっているとき酔っぱらいがジャマしない子どもだけの広場という声の中に、端的に表われている。

地区内の子どもたちにとって第1位の「広い場所」と、第3位の「おとなのいない所」とは表裏の関係にあることを押えておかねばならない。

「おとなのいない所」8%, 件数にして26件を分析してみると、その子どもたちは今宮小学校に集中している(26件中17件で65%)。

広い遊び場を求める子どもたちは、学校別に抽出しても表24のごとくあまり変化は見られない。

しかし「おとなのいない所」を求めている子どもたちには、一つ

表(23-2) 学校別遊び場ベスト5 (地区内) (%)

	萩之茶屋小	今 宮 小	あいりん小
1	広い遊び場 (54.3)	広い遊び場 (54.3)	広い遊び場 (31.2)
2	のりもの、遊具、 のある公園 (18.0)	広くて遊具のある公園 (12.1)	野球、サッカー、 のできる所 (25.0)
3	きれいな公園 (11.1)	おとなのいない所 (11.4)	きれいな公園 (18.8)
4	野球、サッカー、 のできる所 (7.4)	安全で車のない所 (6.0)	のりもの、遊具、 のある公園 (12.5)
5	おとなのいない所 (4.9)	芝生のある所 (4.7)	—

表(24) 広い遊び場をもとめる子ども (学年別) %

	1	2	3	4	5	6
萩之茶屋小	47.6	56.5	50.0	63.3	59.3	65.5
今 宮 小	42.1	68.4	70.0	63.0	42.3	69.2
あいりん小	66.7	0	33.3	0	50.0	11.1

表(25) おとなのいない所を求める子どもたち ()内は女子

	1	2	3	4	5	6
萩之茶屋小	1 (0)	1 (1)	0	1 (1)	3 (3)	2 (2)
今 宮 小	0	0	2 (0)	4 (2)	7 (5)	4 (1)
あいりん小	0	0	1 (1)	0	0	0

の傾向がある(表25参照)。さきに指摘したように、今宮小学校と萩之茶屋小学校の、しかも高学年の女の子たちに集中している(全体で16件、9.7%)。

統計に表われた数字は、一つの傾向を持っている。これはおとながじゃまする、酔っぱらいがいやだという声と重なることは、地区



外の子どもたちの希望の108件中、おとながいないことを希望したのは萩之茶屋小学校に3件しかいないことに端的に見られる。その証拠

に、いちばんおとなをいやがる数が多い。今宮小学校においても、地区外では0となっている。とすれば、三角公園のおとなたちに対する不満の表現として見るべきである。

これらの声は、この地区においてはただ子どものために遊び場をつくればいいということだけでなく、その内容が問われている。もちろん、広い遊び場をつくることは先決条件である。

第9節 テレビと子どもたち

子どもたちがテレビを見る時間は、意外に短い。しかもテレビを見ていない子どもたちが、地区内外の各小学校を通じて9.5%もいることがわかった(表26参照)。

全体的に見れば、地区内が92.1%(291名)で地区外が86.2%(100名)と、地区内の子どもたちがよくテレビを見ていることになる。地区内で7.9%(25名)、地区外で13.8%(16名)の子どもたちはテレビを見ていない。

表(26) テレビをみた子 みない子 ()内は%

	み た		み ない	
	内	外	内	外
萩之茶屋小	144 (94.7)	67 (88.1)	8 (5.3)	5 (11.9)
今 宮 小	126 (92.0)	58 (85.3)	11 (8.0)	10 (14.7)
あいりん小	21 (77.8)	5 (83.3)	6 (22.2)	1 (16.7)

時間の長短と同時に、見ていない子どもたちに目を向ける必要がある。テレビを見ないほうがむしろ不自然であり、その原因をさぐらなければならない。

一つの傾向は、塾などに行っている子どもの多くがテレビを見ていない点である。とすれば、これは一般的な傾向といえよう。

子どもたちのテレビを見る時間はどうか。あいりん小学校、萩之茶屋小学校の2校では1～2時間が平均であり、今宮小学校では3時間までに集中している。



これらの時間にはあまり問題はない。むしろ、4時間以上もテレビを見ている子どもたちがいることである。

萩之茶屋小学校では8名(内

5時間以上2名)、今宮小学校14名(内6名)あいりん小学校2名(内0)、合計24名の子どもたちに注目すべきである。もちろん、長時間テレビを見る子どもたちは、地区外にもいる。4時間以上は3校平均して5%前後である。

問題はなぜ4時間以上もテレビを見なければならないにある。とくに地区内の24名の子どもたちに焦点をしばって考えてみたい。

一例をあげれば、部屋が狭くて親たちが寝るまでいっしょにしている子ども、また不在家庭の子はテレビを見ながら、父や母の帰りを待っている。たとえば、小学校2年生の男の子で6時間以上もテレビを見ている子どもの事情はこうだった。放課後から午後6時まで弟と母親の帰りを待って留守番、母親の帰宅後は母親とテレビを見ながら食事。この男の子にとっては放課後、即テレビを見ることである。

しかしこの子は、好んでテレビを見ているわけではない。面接の時こんな願いを述べている。

「ほんとは、広い場所で走りやおにごっこがしたいねん」。しかし、この子どもの願いは、現在のあいりん地区ではかなえることができない。その理由はあらためて説明するまでもあるまい。環境がそのことを許さないのである。

今日、テレビと子どもたちを問題にするとき、テレビの内容うんぬんがまず問題にのぼるが、この調査をして感じたことの一つは内容もあるが、それ以前に、「テレビしか見ることのできない子ども」「遊び、即テレビ」という環境を押しつけたおとなたちの責任が問われてはいないか。と同時に、長時間狭い部屋でテレビを見ること

は、目の健康にもけっしてよくない。

テレビが子どもたちをお守りしている状態から、一日も早く子どもたちを解放することが、何よりも優先されなければならない。

第10節 子どもと学習

子どもたちは放課後、自主的にどれほど学習しているだろうか。地区内の子どもたちについて学習時間をまとめてみると、表27のようになる。

表(27) 子どもの学習時間

	0	30分 まで	30分 ～ 1時間	1時間 ～ 1時間半	1時間半 ～ 2時間	2時間 ～ 2時間半	2時間半 ～ 3時間	3時間 以上
全体	127	51	39	39	26	15	7	2
男子	66	23	14	17	16	7	3	1
女子	61	28	25	22	10	8	4	1

1年生から6年生のうち、全体で41.5% (男44.9%, 女38.4%) の子どもたちが全然学習していない。これは地区外の子どもたちと比較すると、かなり高いパーセントである。地区外の子どもたちは、全体で30.2% (男43.9%, 女17.0%) である。この原因については後述する。しかしこの傾向は、学年別に見てもだいたい同じである。

表(28) 学年別にみた学習しない子ども () 内%

	低	中	高
地区内	40 (46.0)	50 (47.6)	37 (32.5)
地区外	18 (51.4)	7 (20.6)	10 (21.3)

全然学習しない子どもたちを低学年から高学年に分けて比較したのが、表28である。

低学年ではさほどの差はない。むしろ今回の調査に限れば、地区外の子どもたちのほうが学習しない率が高いが、中学年・高学年になるとその傾向は全く逆転する。特に中学年では、その差の著しいに気づく。

さらに学習時間について検討するとき、次のような相異にも気づく。地区内では30分以内の子どもたちが36.3% (30人) 占めている。これは、地区の子どもたちも、学年が上がるにしたがって学習しようとする意欲の表われである。

地区外の子どもたちは、高学年で30分から1時間半までが55.4% (26人) であり、1時間半から2時間半以内は12.7% (6人) と低い。

ここではさらに学習内容と環境について検討する必要がある。

学習時間にはもちろん塾の時間も含まれるが、子どもたちと塾(学習塾、ソロバン塾)との関係は、表29のように整理できる。

表(29) 塾と子ども %

	塾へ行かない		塾へ行く	
	地区内	地区外	地区内	地区外
萩之茶屋小	80.9	83.3	19.1	16.7
今宮小	77.4	44.1	22.6	55.9
あいりん小	100	100	0	0

地区内の子どもたちの81%は塾へ行っていない。特にあいりん小学校の子どもは、全然行っていない。もっとも、これはある特定の

日で、これをもって子どもたちが塾へ行っていないと断定はできないが、他の日についてもほぼ同じ傾向は期待できよう。

塾へ行く子どもたちも、萩之茶屋小学校では1時間以内(15.1%)であり、今宮小学校では1時間半(11.7%)であって、塾の種類はほとんどがソロバン塾である。



さて、子どもたちは高学年になっても学習しないという原因と、その環境について考えてみると、子どもたちが学習したくても、学習する

環境を持たないということである。子どもたちが学習したいという意欲は持っているが、そのような環境が用意されていないことに注意すべきである。

1家族1室で生活する子どもたちの学習条件は、子どもたちの遊びの環境をととのえるのと同様にたいせつな点である。

地区内に放課後自由に利用できる子ども図書館のような施設、共同で学習できる施設が必要といえよう。

学年別、時間別の子どもたちの学習に対する反応から、以上のような指摘はけっして不自然ではない。

第11節 子どもの生活

―夕食・こづかい―

われわれは子どもの遊びを通じて、子どもたちの放課後の生活を検討してきたが、特に夕方から夜にかけての子どもたちの生活に焦点をあてつつ、一つのまとめを試みたい。

たとえば、夕食はどんな時間に食べているのだろうか、遊びの調査からは表30のような結果がえられた。

表(30) 夕 食 の 時 刻

時刻	5.00	5.30	6.00	6.30	7.00	8.00	9.00
	13.1%	9.6%	21.1%	14.7%	26.8%	11.2%	3.5%

この表からも明らかなように、ピークは7時であり、6時、そして6時半と続く。つまり、62.6%の子どもたちは、7時までに夕食を済ませていることになるが、これは地区外の子どもたちと比較しても、さして変わらない。

地区外の子どもたちのうち、6時～7時までに夕食を食べたものは、116人中84人で、72.4%にあたる。

ところでわれわれは、このような平均的時刻に夕食のとれない子どもたちにこそ目を向けなければならない。

9時に夕食をする子どもは、地区外では116人中1人である(0.9%)のに対して、地区内では313人中11人(3.5%)と高いことがわかる。

それだけではない。この日、夕食がとれなかった子どもは、地区内では4人いるが、地区外では0であるし、夕食といっても外食で済ませた子どもたちが14人もいたことは、子どもたちの食生活の一面を物語っている。

欠食した子どもたちを学校別にあげてみれば、萩之茶屋小学校、あいりん小学校が各1人、今宮小学校が2人の計4人である。少ないといえそうもいえるが、成長期の子どもたちが欠食することは、健康の面からいってもけって望ましいといえるものではないし、少ないからといって放置できる問題でもない。

夕食の遅い子どもたちと同様、この子どもたちの食生活にも、何らかの具体策が講じられるべきではないか。

さて、子どもたちの動向を知る一つの手がかりは、そのこづかいの使い方である。萩之茶屋小学校の子どもたち（地区内）にしばって考えてみたい。

この日、放課後子どもたちが使ったお金の総額は6,370円である。1人平均46円。内訳を見ると、表31のように整理できる。

男子の平均は49円、女子の平均は43円である。

学年別に見ると、表32のようになる。ひとりで使った金額のベ

表(31) こづかいの内訳

学年	1	2	3	4	5	6	計
男	13人	10人	13人	13人	14人	8人	71人
	410円	810円	650円	520円	750円	340円	3,480円
女	10人	12人	10人	7人	14人	13人	66人
	320円	640円	456円	240円	720円	520円	2,896円

表(32) 学年別こづかい額 円

性別	1	2	3	4	5	6
男	31	81	50	40	53	42
女	32	53	45	34	51	40

表(33) こづかいベスト5 円

順位	金額	学年	男女	種類
1	250	2	男	おかし
1	250	2	男	かぶと虫ぎのさなぎ
2	210	3	女	おかし
3	170	5	女	電車賃
4	150	5	男	乗り物
5	120	2	女	おかし

表(34) 食物に使ったこづかい額 円

学年	1	2	3	4	5	6
男	38	68	48	35	53	33
女	31	54	54	34	46	40

これらからもし一つの結論を出すことが許されるならば、男子に比べ、女子のほうがこづかいの使い方がひかえめといえよう。また、こづかいの使い道は、食物（おかし類）が圧倒的に多いことである。これまた、この地区の子どもたちの食生活の一端でもある。

ト5は表33というようになり、最低は、おかし10円である。10円のこづかいは137名中男5人、女4人の計9人である。

さて、この中で食物、特におかしに使ったこづかいを検討すると、全体で96人で4,310円となり、67.6%にあたり、平均44円となる。学年別、男女別に整理すると、表34のようになる。